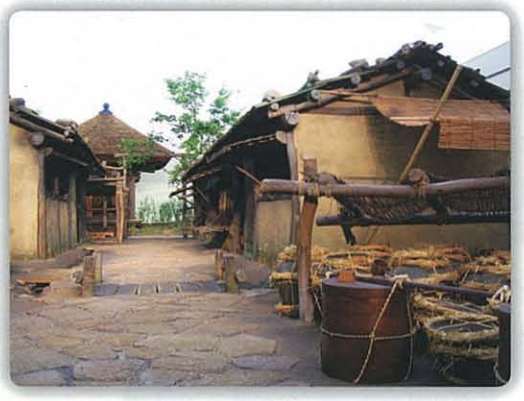
中世・草戸千軒探検⑤ ～塗師（ぬし）の暮らしぶり～

草戸千軒Ⅰ展示室は、“よみがえる草戸千軒”をキャッチフレーズに、今からおよそ600年前の南北朝時代（広い意味の室町時代）を中心とする草戸千軒の町並みを実物大で復原したもので、博物館のメイン展示となっています。

今回は井戸端の広場を抜けて、その奥に連なる町屋へと進んで行きましょう。

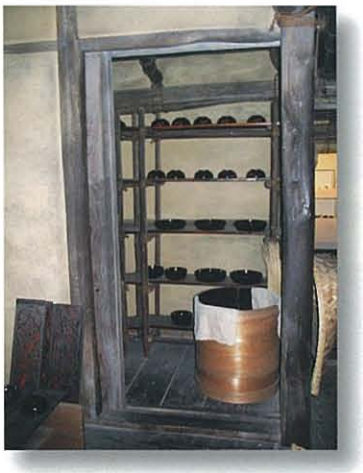

町家のたたずまい

草戸千軒の町屋に暮らした人々の多くは、「職人」と呼ばれる人々でした。中世には、農業以外の専門的な技術によって生計を立てている人々を職人と呼んでおり、その中には手工業者だけではなく、商人・金融業者や博打（ばくち）打ちまでもが含まれていました。

遺跡の発掘調査によって明らかになった職人の代表が、「塗師（ぬし）」とよばれる漆（うるし）塗りに従事する人々です。

塗師の仕事場

遺跡からは漆の容器や、漆を塗るためのヘラや刷毛（はけ）、あるいは素地（きじ）をなめらかに整えるための砥石（といし）などが数多く出土しており、この町を拠点に活動する塗師職人がいたことを確認できます。


製品を乾燥させるための風呂

再現した塗師の家は二軒長屋の一軒を占めており、土間を挟んで片側が仕事のための空間、もう一方が食事などの生活のための空間となっています。

仕事場にはヘラによって黒漆が塗られた椀や皿が並んでいます。そのうしろでは、朱漆によって鳥や草花の文様を描くための準備が進んでいます。仕事場の奥にある押し入れのような空間は風呂（ふろ）と呼ばれる小部屋で、この中で塗り終わった漆器を乾燥します。完成した漆器はこの町の市で売られたり、あるいは周辺の村に行商に出ることもありました。

生活のためのスペース

遺跡から出土した漆器の文様は非常に洗練された美しいもので、草戸千軒の塗師たちの技術の高さを示しています。華麗な文様の描かれた漆器は、この地域の人々の生活に彩りを添えていたに違いありません。